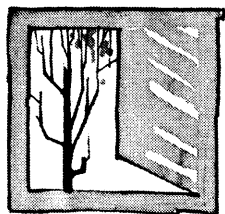


保育実践の試み

時代の流れと幼児の社会性

加藤 定夫



1

現代における個人のパーソナリティの特質として、D・リー

スマンは「他人指向型」と名付け行動決定の際、自己の内面^{注1}で、
動機の葛藤を生じて自己裁定することなしに、マス・コミ、マ
ス・プロを中心とする現代の情報網の中に行動決定のよりどこ
ろを求めているとしているのである。さらに、もう一歩進めて
考えてみるならば、個人の行為そのもの源になる動機付けそ
のものが、内面的に誘発されるのではなく、これもまた、マ
ス・コミによって外側から誘発されるのである。

たとえば、連休があると家族そろって旅行に行かなければ、

時代に残されるような感覚をもったり、デパートでも、生活の
必需品を買うのではなく、イメージを買ってくることもよくあ
あろう。

このようなことは、現代人が、他人の意見や行動や目標など
をリーダーのように敏感にとらえて適応し、その代り、自己の
内部的「一貫性を放棄しているといえよう。さらに人間関係の面
でも、最近では、アパルトやマンションに住んでいた場合、隣人
が一ヵ月以上も姿を見せなくても気にせず、半ば白骨になって
いたというような事件も起こっているのである。

このように、地域社会の中で大人同志の人間関係が疎遠にな
っており、自己の行動に確信をもっていない時に、自分の子ど

もをロッカーに入れるということまでいかにしても、教師、保育者、大人の中に潜在的に問題を蓄積しているといえるのである。そして、養育者は、わが子を育てるための知識をテレビ、雑誌に頼りきっているのが現実であろう。

このような社会状況の中で、幼児教育という立場で、幼児の社会性を指導するということは、いかなる意味をもつのであろうか。

過去の日本における幼児教育の歴史をみると、社会性の指導という点では、常に友だちと仲良く、協力して楽しい生活や遊びができるよう指導されてきたのである。そこには歴史的感覺のない横断的な指導がされてきたといえよう。しかし、特に最近、幼児期、児童期と親孝行で、学校でも、近所でも評判のよい子が、青年期になって豹変する例も目立ってきていることは一体何が原因しているのだろうか。その原因の一つに幼児期の教育があるといわれているが、一体それは何であろうか。その原因として考えられるのは、幼児期から児童期を通して、社会生活のわく組が多様化しすぎ、「他人指向型」の思考方法が身につけていくからではないかと考えるのである。

2

そこで、現在行なわれている幼児教育の中で、西欧と、日本との社会性の育成での面での方法論を概略的に検討してみたい。これまで、日本における幼児教育は、日本的価値観となつている集合主義的、伝統主義的態度の育成にある。これを教育的な面で考えると、その集団の安定のために、個人の自立性、自律性、協調性などを育成し、集団の和が保たれて始めて、個人の幸福がもたらされると考えるのである。たとえば、幼稚園、保育園における一斉保育、行事の重視の中に、それが示されているといえよう。これは保育者が集団の安定という尺度から個人をみるということに起因しているからである。これに対して、西欧的人間観の根本にあるものは、個人主義的態度の育成にある。この西欧的人間観にあるものは、個人が幸福になつて始めて集団全体がよくなるという考え方である。

これは、ルソーの社会契約論的考え方にみられる通りである。また、ヨーロッパにおけるモンテッソーリ教育法の重視、あるいは少人数制による個別的指導法の重視などに見られる通りである。それは個人の安定という尺度から集団をとらえるのである。

これらは社会性の実際的な指導の面にも違いとして表われてくるのである。日本の大勢の幼稚園の場合、まず、入園頭初に

おける指導として、幼稚園生活に必要な約束をいろいろと教えられる。そして、この約束を守ることが、いかに楽しく幼稚園生活を過ごせるかを教えられるのである。これが、幼稚園生活を楽しく過ごさせるための指導という形で表われるのである。さらに、これらの約束を守れなかった場合には叱られ、時には他の子にも悪い行為としてみせつけられるのである。反面、集団の約束を守り、献身的に集団の和を保とうとする子はほめられるといった具合にひとつの型にはめられていく傾向があるのである。

しかし、西欧においては、G・マーフィーが述べているように、^{注2)}幼稚園生活の頭初において、まず保育者の役割としては、幼児に対して集団の約束を教えることではなく、幼稚園という集団がいかに自由であるかを話し、示して、自由に振舞うことを勇気づけ、彼等が興味をもつ範囲を広げようと努力することであるとしている。次の段階として、幼児は新しい段階としての世界の中で、いろいろな未経験な現象にぶつかり、互いに衝突し、助け合うことを自らの体験として学ぶのである。そこには子どもたち自身による問題の発見と集団のもつ意味を考えさせるのである。さらに次の段階として彼等は人間関係の中で、急速に洞察力を修得するのである。そして自分の洞察力に対して、

くり返し経験を通して、自分自身で評価し、集団のもつ意味を自分の次元で理解し、社会性の紐を形成していくのである。このように、日本と西欧においては教育観が異なっており、当然そこから受ける影響のされ方も違ってこよう。それに、日本の社会のように情報化がますます密になってきている状態では、画一的思考作用により一見自由な社会の中に、個人の主体性が埋没してしまう傾向が、ますます強くなってきているといえよう。

そこで、現代において、幼児の社会性を培うという場合は、個人の主体性の確立としてまず、動機付けられた社会的行為が、行為として遂行される以前に、自己の内部で葛藤し、自分自身で決定を下すという指導が行なわれなければならない。さらに行為における自己裁決の機会をより多くもたせるという経験を意図しなければならぬであろう。ここに個人の主体性の確立があり、それゆえに、保育者が「仲良くしましょう」とか「人に親切にしましょう」という言葉をくり返し強制しても効果があがらないという論拠がある。

3

これらの意味での社会性の育成のひとつの試みとして、萩中

教育研究所の幼稚園課程、年中組、年長組に対して行なわれた実験がある。すなわち、彼らは、一日のうちで課題がひとつ与えられ、その課題は一日のうちでいつ行なってもよく、登園後すぐに行なう子や降園時間直前になって着手する子などおり、なかには、その日では完成せず、次の日まで持ちこす子もいた。

この課題は、教師の意図を中心として指導し、興味を新しい範囲に広げようとする試みでもあった。その他は、自由活動が主体で、これは、子どもの主体的な遊びの中で、個別的な指導を行なっていたのである。さらに自由活動の領域を広げた。

すなわち、お弁当もいつ食べてもよく、また園のどの場所に行つて食べてもよいことにした。そこでの保育者の役割は、幼児各々が興味をもつような環境設定と、活動に対する動機付けを行なうのである。

このような活動状況の中から、子どもたちの動きをみると、一日目は、課題を降園間近になってあわてて行なう子が目立っており、積極的な子が絵を画けば、それを真似し、一人の子がお弁当を食べはじめると、たとえ十時ころでもお弁当を食べるといった具合に、個々の主体的活動はほとんど見られなかった。

しかし、この実験（一週間に一回）を数回くり返していくことによって、集団の動きに自分の行動を合せるのではなく、少

ずつ個々人の主体的行動が目立ち、同じ時間帯における遊びの量が、最初は一つか二つであったのが、十種類にもふえた。

さらに彼らの行動も、最初は、ものめずらしさからお弁当を園のすみの誰もいない場所に行つて食べてみたりするグループもあったが、誰から怒られることもなく、結局、教室の中で食べたり、木の下で食べたり、落ち着いてくるようになった。また、集団の中における新しい規範、または集団性を高めるものとしての、いわゆるお当番に相当する仕事の役割分担が出てくることも示された。

これらのことから、幼児集団の中での規範は、保育者が、外からの強制的なわく組として与えられる場合には、幼児の活動欲求を阻害することが多く、その規範に対して納得することが少ないことが実験の中で見られたのである。反面、幼児が自分たちで作出した規範は彼等のレベルで納得しているため、その規範を破ることが少ないのである。すなわち、保育者の作り出したモラル（規範）はモラル（志気）を減退させるが、幼児自身の作り出したモラルはモラルを高めるといふことが示されたのである。

これらのことは、集団のダイナミックな相互関係の中から新しい小集団の発生、または集団の組織性などの発展という集団の機能と主体性が、自己の所属集団の中で、どのように位置付けられるかを理解していくようにしなければならぬし、役割—期待の分割での役割葛藤。役割一致の発展という通路を通して集団としての社会的役割、社会規範という機能を認識していくのである。これは言い代えるなら社会行動における動機という主観的範ちゅうを、できるだけ自己裁決できるような機会を多く与えることによって、社会の機能という客観的範ちゅうに組み代えていく過程であるといえよう。

結局、この実験から、幼児は仲間から行動の選択を迫られた場合、自己のすべての能力をフル回転して判断を下し、全力で物事に集中しており、幼児教育の中で非常に重要な要素であり、かつ最も現代人に欠けている面に対する指導が、幼児教育の中で、ある程度可能であることを示しているのではないだろうか。

(秋中教育研究所)

注1……D・リースマン「孤独な群衆」加藤秀俊訳

彼は、封建社会のように階級のわく組が明確な社会では、伝統、慣習を守っていくことが特徴であるとし、これを「伝統指向型」と呼び、近代社会のように、自分自身で行動決定をしなければならぬ社会のパーソナリティー特性として「内部指向型」と名付け、「他人指向型」の現代と區別するのである。

注2……G. Murphy『The Process of Creative thinking、

Educational Leadership (14) 1956 p p 11—15

訂正

八月号54ページ、「母のめぐまし」の第一節

「びちりとめぎめる」は、

「び・た・りとめぎめる」の誤りです。

著者および読者におわび申し上げます。